

## ふれあいエコノミアン ～「サヨナラ」だけが人生か～

経覧会会長 川野克美 (S33 経・経)



入学から、やがて卒業。晴れて社会人となって就職し、しばらくすると海外赴任や転勤、転居。場合によっては転職、起業。いつの間にか、10年、20年、30年と経過して、退職の 때가やってくる。その間、「さよなら」の回数が何回あったことでしょうか……。

いきなり、ふざけた副題をつけて恐縮でしたが、5月の連休が明けて、フレッシュマンの歩く姿勢が澁刺となる頃が来ると、小説家・井伏鱒二の「厄除け詩集」を思い出します。中でも有名なのが次に掲げる詩の後の2行です。

“この盃を受けてくれ 　どうぞなみなみ注がしておくれ  
花に嵐のたとえもあるぞ 「サヨナラ」だけが人生だ”

この「どどいつ調」の詩は中国・唐の時代に詠まれた五言絶句「勸酒」の翻訳詩として知られています。

それはともかく、風雨で桜が散るように人生には別離がつきもの、だから花が散らないうちに飲み交わそう、といった意味合いでしょうが、長いサラリーマン生活をやっている、なにやかやと歓送・迎会が数多くあり、“風雨のあること”を忘れて杯を重ねた経験が実に多かったことを思い出します。その度ごとに、新しい機会に接して自分を駆り立て、新しいことを経験し、人間関係が広がっていくはずですから、「サヨナラ」「ヨロシク」の人生はすばらしいことといえます。

経覧会では、エコノミアンのそうした経験を語り合う場をつくりたいと念願しています。経覧会サロン(毎月第二水曜日)も定着してきました。本誌でも、エコノミアンの経験が語られています。あとは、できるだけ多くのエコノミアンが参加してくれることを期待するばかりです。

### 年会費ご支援のお願い

年会費2,000円の送金者が前年比で半分以下に減少していることが気になります。「前期決算」(別表)では、エコノミアンの年2回発行で当会の“虎の子”の財産を半分食い潰してしまいました。9,500人のOBへ宛てる発送費用の節減や賛助金(広告代ほか)増収策など工夫をこらして参りますが、どうぞ、当会の運営に対してみなさまの一層のご理解とご協力を切にお願いいたします。

## 2001年度総会報告

総務委員長 八木達郎 (S49 経・経営)

平成13年11月17日(土)14時より上智大学6号館310教室にて、経覧会第13回定時総会が開催されました。冒頭、川野会長から、13年間にわたる経覧会活動を振り返りながら「“エコノミアン”年2回の発行や経覧会サロンの運営がようやく軌道にのりつつある現在、当会の運営が財政面から難しくなっては元も子もないので、役員各位の一段の熱意と工夫をお願いし、あわせて会員のみなさまにも一層のご理解とご支援を仰ぎたい」との挨拶がありました。

議案の審議に入り、別掲の決算・予算などを承認し役員選出を行いました。主な役員は次のとおりです。

- 会長 川野克美 (S33 経・経) 特別企画委員長 古屋 毅 (S32 経・商)
- 副会長 本多義人 (S36 経・経) 堀井 侃 (S36 経・経)
- 遠藤千朗 (S38 経・経) 広報委員長 三木真弘 (S46 経・経)
- 柳本信一郎 (S38 経・商) 総務委員長 八木達郎 (S49 経・営)
- 事業企画委員長 上原隆一 (S51 経・営)
- 会計委員長 西村雅明 (S51 経・経)

続いて講演会に移り、まず本学経済学部長の上妻教授から「日本経済の今後～会計制度変更の意味するもの」と題したお話がありました。連結会計基準、キャッシュフロー計算書、退職金・年金会計、金融商品の会計基準の4点について解説をいただき、21世紀型の企業経営を展望するという大変興味深い講演でした。難しいテーマをこんなに面白く説く先生の“学力”にOBの皆さんは感心しておりました。

今回は二人目のスピーカーとして、ニューヨークからモリソン法律事務所取締役山崎友宏氏(S36経・経)をお迎えしました。「未曾有の国難に直面した米国～ニューヨーク市民の衝撃」と題したお話は9・11事件の直後だっただけに、山崎さんの迫真な話し振りといま、聞く人の心を打ちました。黒板に星条旗をかけた、“AFTER THE ATTACK”という資料コピーにそって話が進められました。フロアでは来年も山崎さんの話を聞きたいという声が多かったことを書き添えます。

講演の後、ソフィアンズクラブで恒例の懇親会に移り、互いの交流に花が咲きました。

## 経覧会 前期決算および今期予算

会計委員長 西村雅明 (S51 経・経)

|      |           | 12/10~13/9 | 予 算     | 実 績     | 12/10~13/9 | 予 算     |
|------|-----------|------------|---------|---------|------------|---------|
| 収 入  | 年会費       |            | 2,600   | 884     |            | 2,000   |
|      | 総会費       |            | 250     | 126     |            | 150     |
|      | 賛助金       |            | 300     | 91      |            | 800     |
|      | その他       |            | 50      | 44      |            | 50      |
|      | (1) 計     |            | 3,200   | 1,145   |            | 3,000   |
| 支 出  | 総会費       |            | 160     | 97      |            | 150     |
|      | 役員会費等     | (郵送費等)     | 50      | 34      |            | 40      |
|      | 会報発行費     | 印刷費        | (800)   | (869)   |            | (800)   |
|      |           | 郵送費        | (1,400) | (1,499) |            | (1,500) |
|      |           | 発送費他       | (460)   | (204)   |            | (130)   |
|      |           | 小計         | 2,660   | 2,572   |            | 2,430   |
|      | 事務局費      |            | 240     | 209     |            | 260     |
|      | 事業費       |            | 70      | 40      |            | 90      |
|      | 予備費       |            | 20      | 0       |            | 30      |
|      | (2) 計     |            | 3,200   | 2,952   |            | 3,000   |
| 収 支  | (1) - (2) |            | 0       | △1,807  |            | 0       |
| 期首繰越 |           |            | 3,420   | 3,420   |            | 1,613   |
| 期末残高 |           |            | 3,420   | 1,613   |            | 1,613   |



## 走れ!「ロケット号」

中谷 義一 (S33 経・商)



1年前、定年退職したのを機に、小型鉄道建設することにしました。場所は我が家の庭で、作業は庭木の伐採から始めました。機関車は「ロケット号」という、1829年にイギリスで行われた機関車コンクールで図抜けた成績を残した蒸気機関車の1/11の模型で、バラ・キットから組み立てました。ロケット号のレプリカがイギリス・ヨーク鉄道博物館に展示されています。

届いたキットの箱を開いて直径127ミリの鉄製車輪が出てきた瞬間、1947年のことを思い出しました。小学6年生の時、友達にベークライト製の車輪をもらった時のことです。直径20ミリほどの車輪が1本の車軸の両端に付いていて、その間隔は32ミリ。丁度、引き違い窓のレール幅に合います。教室の窓のレール上に置いて右に左に転がしているうちに、車輪の上に毎日見慣れた横須賀線電車の影が浮かんできました。今の言葉で表現するなら、「バーチャルなイメージを形の有るものにした」のが私の趣味の始まりです。

実物の大きさがわからないので、竹製30センチ物差しを持って逗子駅の車両基地に潜り込み(駅員さんには内緒です)寸法を測りましたがとても正確には計れません。この時、実物の電車が如何に大きいかを体験しました。40円で車両図面集が売られていることを知り小遣いを貯めて本屋に出かけましたが、45円に値上げされていて買えません。さらに小遣いを貯めてやっと手にすることができました。これは私の初めてのインフレ体験で、以後、わら半紙に謄写版刷りホッチキス製の「1947年版スタイルブック」は私の宝物になり、今でも大切に保管しています。

ロケット号のバラ・キットは、水や蒸気を送るパイプを曲げて繋いだり、水タンクになる樽を木片で組んで水漏れしないようにタガをはめたりして作ります。完成まで4ヶ月を費やしました。作業の中で一番印象深く残っているのは、圧縮空気を送って行うエア・テストで車輪が回転した時でした。ただの鉄の塊でしかないシリンダー・ブロック、ピストン、スライド・バルブ等を組み立て、車輪の回転角度に合わせてこれらをロッドで結ぶと「生きている」ように車輪が回転します。SLの魅力を実験できた瞬間でした。

SLは煙を吐くので洗濯物がある日は運休になります。雨天、寒い日も運休します。

ロケット号が引く客車ができれば、2002年は路面電車を作り無線操縦で運転したいと、目下電気や無線操縦機器の勉強をしています。これが完成したら、寒い日でも家の中から運転を楽しめるでしょう。

(元・上智大学電子計算機センター勤務)

## 「親子二代のソフィアン」 松浦 一夫 (S32 経・経)



筆者(左)と伍堂光雄氏

私は親子二代のソフィアンである。ちょっと珍しいケースではないかと些か自慢している。先日、カミさんの命令で亡き祖父、父の写真類を整理していたら、父の上智大学卒業の記念写真が出てきた。その写真には父の字で「大正壹拾叁年参月、上智大学卒業記念」(原文のまま)と書かれていた。

おそらく、神父館の前庭で撮影されたものらしく、卒業生は22名で、中には教授の方々が並んでいる。残念ながら、私にはホフマン先生しか

わからない。父はドイツ哲学専攻で「俺は二番で卒業した」と常々自慢していた。よくよく聞いてみると、ドイツ哲学科の学生は当時三人しかおらず、下から数えても二番目で、大笑いしたものであった。

ドイツ語の教授であられた宇田五郎先生が父と同期であったと聞いている。その宇田先生については後日談がある。

私が上智に入学したのは昭和27年であるが、なにしろ入学後はよく遊び、ほとんど学校には行かず、出席日数不足で留年の憂き目にあった。父や母になんと説明しようかと思案投げ首であつたが、ある日、父の方から「おまえ、出席日数が足りなくて留年だそうじゃないか」といわれた。なぜ知っているのだろうかとびつくりして聞いてみると、「宇田君から手紙がきた。『ご子息、出席日数不足にて残念ながら留年、あしからず』と書いてあったぞ」とニヤニヤ笑っていた。

私が小学生の頃から、父は勉強しろとかうるさい説教を押し付けることはなかった。ただ、自分のすることは最後まで自分で責任をとれ、他人に迷惑をかけるなというばかりの典型的なベラリストであった。その父からバラされて、この時ばかりは、宇田先生なんと余計なことと思ったり、親子二代のソフィアンとは不便なものだと思ったりした。しかし、今では両親にくだらない言い訳をしないで済んだことを宇田先生に感謝している。

加えて、留年したおかげで、小学校から高校まで同期同窓だった親友の伍堂光男君が一浪のあと上智に入学してきてまたまた同期になつたし、吉田勉君や古知朝彦君等すばらしい友人に出会うこともできた。彼らとともに過ごしたキャンパス生活は誠に充実した価値あるものであった。いまでもゴルフ、旅行、アルコール文化などに親しくお付き合いが続いている。一年余分の大学生活が決して無駄ではなかったと思っている次第である。(元・アド電通株式会社社長)

## 習志野ドイツ兵士を偲ぶ 澤 滋夫 (S29 経・経)



01年11月25日、カトリック習志野教会で「第一次世界大戦で捕虜となり、習志野捕虜収容所で病気のため亡くなったドイツ兵士30名のためのミサ」が行われました。当日は、参集した50名のほかドイツ大使館から6名の方が参列しました。ミサは教会司祭古川師および上智大学教授ハム師の司式により、故郷で家族再会を夢みながら病に倒

れたドイツ兵士を慰めるために行われました。ミサの後、大使館武官は、今日この地で慰霊のミサが行われたことは感無量であり、皆さんの真の友情を強く感じ、感謝に堪えないと述べられました。

99年12月、習志野市習志野文化ホールで「第九交響曲」が演奏されました。ホールのホワイエでは、市主催による習志野捕虜収容所特別展示会が行われました。収集された当時の写真、音楽会のチラシやドイツ兵士が当時作成したボトルシップ、更に軍が作成した見取り図が現在の地図(京成実羽駅付近)に重ねて展示されました。たまたま、私が所属した船橋教会は場所が狭いため移転を決定し、01年初めに、京成実羽駅の近くに用地取得を行いました。展示会の図面をつぶさに見たとき、なんと、新教会の位置は旧収容所の東塀に面した場所となること判ったのです。

調査によれば、「大戦後、上智大学の神父等が訪れたことがあるがミサが行われたことはない」とのことでした。そこで、大使館付武官・司祭をはじめ親しい友人と話を始めたところ、強い支援があり実現に結びついたのでした。

歴史的な話としては、当時の収容所長は維新の西郷隆盛の子息で大戦前ドイツ日本大使館付武官であった「西郷寅太郎大佐」であり、同大佐はドイツ将兵の尊敬を得ていました。しかし、流行したスペイン風邪をこじらせて19年正月には帰らぬ人となりました。また収容所には千人をこえたドイツ将兵がおり、なかでも「ハンス・ミエリス氏」は上海の共同租界のオーケストラ副指揮者で、召集されて青島で捕虜

となりました。同氏が収容所で開催した音楽会は有名で、数多くのコンサートが開かれています。彼は17年に、テオドール・シュトルム作詞の「閉じておくれ僕の眼を」(Schliesse mir die Augen beide)と云う歌を作曲しました。その曲が01年8月にホルスタイン州にあるミリエス氏の子孫の家で発見されたのです。この曲は01年9月に習志野文化ホールで開催された鮫島由美子さんのリサイタルのアンコール曲として歌われました。二期会の小川哲生氏(バリトン)によっても歌われています。

01年11月25日のミサの後で、小川氏の歌う、この曲のテープが流され、悲しくも朗々とした歌声が新聖堂にひびき、参席者の胸をうちました。参席のドイツ人の中には、眼をそっと拭う方もいました。私は、成功裡に終了したこの催しのあと、清涼感が体に漲るのを感じました。これは、教会建設に関わった自分の使命でもあったかと思っています。また、帰国を目前にして亡くなった若いドイツ兵士を想いながら、同時に、我々に「人生とは何か」を教えてくれた故ドイツ人神父教授等(ボッシュ・シュワイツァー先生)の在りし日を想い、彼らに捧げる感謝をこめたレクイエムでもあったかと思っています。

今後、「偲ぶ会」存続のため、日本のほかドイツからの支援と協力を仰ぎたいと考えています。独系の企業、ドイツ関連の国内企業のご支援や経覧会の皆様の応援があれば、私にとってこれ以上に心強いことはありません。

募金ご支援の際には、必ずお礼状と趣意書・会則を送付させていただきます。金額の大小は不問ですが、目安として個人2千円、法人2万円でご願ひできれば幸いです。(元・日本航空中東地区支配人)

振込先 (郵便局 口座番号 00170-2-141858)

「習志野ドイツ兵士を偲ぶ会」代表 澤滋夫

お問合せ、ご意見はe-mail: sawastev@eurus.dti.ne.jpへお願いします。

## マネジメント・バイアウト 野口 雅之(s52 経・経)

今年の2月26日、シュローダー・ベンチャーズ(株)がアドバイスをする投資ファンドが主体となって、ワンルーム・マンションの事業を展開する株式会社マルコーの株式100%を親会社の株式会社ダイエーから取得しました。

このマルコーの様に、子会社の経営陣が独立する場合や後継者不在のオーナーから経営陣が会社を受け継ぐ場合に、自己資金に加えて投資家・銀行から調達した資金で、株式や事業を買い取る方法をMBO(Management Buy-Out)といいます。独立に際しトップ・マネジメントを新たに向かい入れる場合はMBI(Management Buy-In)で、他にもMEBO、EBO等ありますが、総称してバイアウトと呼びます。

98年以降公表されている取引額10億円以上のバイアウト案件は約30にのぼり、日本でもようやく市場がたちあがった状況で、従来のベンチャー・キャピタルとバイアウト(合わせてプライベート・エクイティと呼ばれています)への投資機会を求めて、ここ1~2年に数千億円を超える資金が新たに市場に入ってきたと言われています。

私は、このプライベート・エクイティ投資を業とするシュローダー・ベンチャーズ(株)の前進の会社に1983年に参画してから、今日まで早くも19年になります。元々は赤井電機というオーディオ・ビデオメーカーの海外営業部で海外の子会社、代理店の担当としての仕事をしていましたので、全く違う世界に入った初めのころは戸惑いもありました。今でこそ、若い人たちの中でベンチャーキャピタリストになりたい、プライベート・エクイティで仕事をしたいという人たちも出てきましたが、83年当時は先発の数社に加えて、銀行や証券会社の子会社を設立してこの事業に乗り出してきた頃で、ベンチャー企業に投資をする会社といっても、ほとんど認知されておりました。



最近の市場状況を見ると、本当に隔世に観があります。弊社でも6件のバイアウト投資の実績があり、現在ではベンチャー・キャピタルよりもバイアウト投資の方が金額的には大きくなっています。

私自身も、マルコーに加え、一昨年の2月に熊本県にあるスーパーマーケット事業を展開する企業が所有していた、TSUTAYAブランドのビデオレンタル店を運営する子会社の買収案件に関わり、買収前の調査・交渉で10数回、独立後も毎月の取締役会へ出席するために出張し、通算すると30回以上熊本へ入っています。最近ではほとんどが週末日帰りで、残念ながら人気の黒川温泉にはまだ行ったことはありません。大企業から独立して、生き生きとしている人たちの様子を見ると、こちらは大変刺激を受けます。

さて、上智を卒業してもう20数年立ちますが、今でも経済学部のクラス仲間数人と年に1~2回は会って、年々オジサンになっていく様子をお互い確認しています。皆、体型は20代の面影は全くありませんが、不思議と頭髪が残り少なくなっている者は1人もおりません。学生時代にバカなことを共有した仲間と会うと、仕事のストレスも癒され、直ちに若かりし頃にフラッシュバックします。これからも、自分自身の人生の中で、上智の友人との付き合いを大切にしていきたいと思っています。(シュローダー・ベンチャーズ株式会社勤務)

## 「ディーターズ先生との再会」 清水 一郎(s33 経・商)

第2水曜日にあたる去る3月13日、ソフィアンズ・クラブで開催された定例の経覧会サロンにロバート・ディーターズ先生(アメリカ、オハイオ州出身)が来られるとの耳寄りな知らせがあったので、何を置いても馳せ参じた。(後で聞いた話では、経覧会会長の川野君が先生に声をかけてくれたとのことであった。)サロンに参加したエコノミアン(経済学部OB)の方々に混じって、おいしいワインを片手に、大変勝手ながら“自分たち”だけの懐旧談に花を咲かせた。

“自分たち”とは昭和33年経済学部卒で、昭和29年に入学した一年生のときに、「A6」というクラスでディーターズ先生に英語を半年間学んだ仲間である。後に、その仲間で「ツベルフ・グループ」(12人会)を作り、いまでも存続している。サロンに集まった仲間は10名。当時の先生は、イエズス会の仕事で急遽アメリカに赴任しなければならぬことになり、きわめて短い期間のクラスではあったが、当時の私たちにとってはなんとも印象深く、いまだに当時のことが忘れられない。

先生は、後年、上智大学の理工学部長など要職を経て、現在は名誉教授であり教会の司祭でもある。当時は29歳の若さあふれる好青年で、日本語もいまいほどお上手ではなかったせいもあり、日本語がひとつもない、全部英語で書かれた教科書(当時は珍しかった)を使って、話す言葉も大部分英語での授業であった。

昭和20年代後半の日本は占領軍(米軍)の影響を受けたとはいえ、まだまだ現在のようない国際化した時代ではなく、先生が私たちに与えてくれた異文化はたいへんにキュリアスでこの上なく新鮮なものであった。当時、先生がもたらした先進文化は現在の私たちのものの考え方の根源で脈々と息づいているように思える。国際化、多様化、異文化理解などなど、今の世の中はこれらの要素なしには全体像がわ

からない現実を思うとき、当時の私たちがいかに先進的で素晴らしい環境にいたかがうかがえる。

サロンに集まった元大学一年生たちは卒業後、それぞれの分野で精一杯活躍し、今では定年

左端が筆者、右から2人目がディーターズ先生





後の第2の人生を豊かに過ごしている連中ばかりである。その連中がこの日ばかりは、77歳とは思えない若々しい元担任の先生と、50年近く前の「先生と生徒」の関係を再現し、思い出話を時を忘れた。

ディーターズ先生のあと、入れ替わりにジョーンズ先生が担任となった。その後、ステンパー先生、マーシー先生、ベッツ先生にそれぞれ教えていただいた。50年前のなつかしい思い出話が甦った。ボッシュ先生のこと、元の図書館前で卒業記念写真を撮ったときのこと、カマボコ兵舎(学生寮)での生活のこと、仲間がアメリカへ留学するので横浜港まで見送りに行ったこと、ESSの英語劇やスピーチコンテストに出たこと、金口先生・小稲先生・野口先生のことなどなど、なかなか話が尽きることはなかった。

ディーターズ先生をクラブの玄関で見送ったあと、次回はもっと多くの仲間と呼びかけて再会しようと約束し、心地よい満足感で家路についた。  
 (元・東京航空計器(株)生産管理部長)

## To the "Group of Twelve" Robert Dieters S.J (元上智大学教授・理工学部長)

Dear Friends,

Thank you for inviting me to the gathering of the Economians the other evening. I had met Mr. Kawano once or twice at meetings of the Sophia-kai, but that was the first time to meet many of you since we were together on the campus of Sophia in 1954-5

I read the reminiscences of Mr. Shimizu which Mr. Kawano sent me by e-mail the other day. It brought back many memories to me also. For you it was the first time for you to come into living contact with real live Americans. For me, it was also my first chance to come into contact with the Japanese people. I came to Japan in September 1952, but the first year I spent in a house on the isolated campus of Eiko Gakuen where about 30 of us newly arrived missionaries lived and studied Japanese. During that year, although I was in Japan, actually I had very little contact with any Japanese people. We young missionaries sometimes took a walk to the nearby Takatori Yama where small school children came sometimes with their teacher for 写生. In our children's Japanese we would talk to the children. And the children would ask us for "chewing gum." It was the only word they knew, because they learned to ask the soldiers around the Yokosuka base for gum.

But the first Japanese young people I really got to know was your A6 class and the A4 class. I only taught your class from April until the summer when Mr. Adrian Jones arrived in Japan and came to Sophia to teach. (I still have contact with Jones who lives in the Chicago area, and is now retired.) My first good impression was of how friendly you were, and how eager to learn about the world outside of Japan. Now foreigners, both in Japan and outside of Japan, know much more about Japan than we did in those days. Also, Japanese know much more about the world outside of Japan. Neither foreigners nor Japanese can any longer have the thrill which we had when we met one another.

I am looking forward to meeting you again. I will try to find some old photographs and search my memory for stories from those good old days.

Robert Deiters, S.J.

## わたしの転身ストーリー 宮田 摂子 (H3 外・英)



現在、フリーで翻訳の仕事をしています。10年近く勤めた会社を辞め、はや9か月がたちました。以前は機械メーカーの総合職として転勤あり出張あり現場の仕事あり夜の接待もありという、まさに「サラリーウーマン」を地で行く毎日。それが今では自宅にこもって仕事をするようになり、生活は180度変わりました。

この転身のそもそものきっかけは、3年ほど前、社内の異動で英語を使う機会が減り、興味本位で翻訳学校に通い出したことです。最初はごく軽い気持ちでしたが、次第に翻訳のおもしろさにのめりこみました。私が勉強したのは出版翻訳、つまり海外書籍の翻訳です。同じ文章を訳しても十人十色の表現になり、訳した文章にはその人の知性や性格までもが映し出されます。寝る間を惜しみ、通勤中も休日もずっと原文や訳文とニラメッコの毎日でしたが、楽しくて仕方ありませんでした。仕事のストレスも、全部翻訳で解消していました(笑)。それでも最終的に自分の「夢」を選ぶまでには散々悩み、退職を決心したときはまさに清水の舞台から飛び下りるような気持ちでした。

現在は、ノンフィクション分野の出版翻訳に携わっています。ビジネス書から歴史、科学、芸能もの、はては学術書までとても幅広い分野ですが、好奇心が旺盛で何でも知りたい私にはうってつけです。ある出版社のオーディションに幸運にも合格し、最初に手がけたのは「快眠法」の本。納期が短く、快眠どころか「超」睡眠不足と闘いながらの初仕事でプロの厳しさを痛感しました。でも初めて自分の訳書を書店で見つけたときは、ドキドキしてなかなか手に取ることができず、本の前を行ったり来たり、辺りをキョロキョロ。この感動は忘れられません。その後も仕事が続き、これまでに実用書を5冊ほど手がけました。内容は、建築にワインにインドの健康法に……。科学雑誌の記事も翻訳しています。次はどんな話題が飛び出すのかと毎回とても楽しみですが、産みの苦しみも相当なもの。仕事のたびに「未知(無知?)との遭遇」です。調べることが多いので、図書館とインターネットは必需品、必要ならば大使館や国の研究所にも問い合わせ、資料集めに色々な場所にも足を運びます。個人的な人脈もかなり貴重な情報源で、専門家やマニアな友だちの助言に何度も助けられました。

いまの夢は感動のドキュメンタリーを訳したい! 自分で見つけた海外の良書を日本に紹介したい! いつかは夢の印税生活を…と尽きません。でも、まずは地道な地道な文章修行あるのみです。(経鸞会賛助会員)

## 「利光さんを囲む会」 柳本 信一郎 (S38 経・商)

2002年の年明け早々の1月23日、経鸞会を中心とするソフィアン有志による「利光松男さんを囲む会」が開催された。

利光さんは昭和22年に卒業後、昭和27年創業の日本航空の草創期に関与された。以後会社の中核として日航の発展と海外旅行の普及に多大な貢献をされた。特に1990年から5年間、6代目の社長として日航のみならず、日本の民間国際航空の発展に多大な貢献をされた。その功績により、昨年11月に勲2等旭日重光賞を受賞された。

後列右から3人目がキャリア学長、4人目が利光さん



この報に接した経鸞会は祝賀会を開催したいと申し入れ

導かれるがごとく、トントン拍子で今の仕事が決まりました。松下政経塾には1年半ほどしか在籍しませんでした。これが契機となって自分を最大限に活かせる仕事へと方向転換することができたのです。

これが自分の天職！と思えるほど、この仕事は楽しくやりがいがあります。留学生たちへのサービスに対する評価が直接自分に跳ね返ってくる手応え、日々のやりとりの中から彼らの信頼を得られた時の喜び、日本に対する印象を左右しかねない重要な立場であること、など理由はいくつも考えられます。しかし、なんと言っても理屈抜きに留学生たちとの交流が楽しいのです。彼らの中から未来の国家指導者が誕生することを期待しつつ、私も日々の研鑽を積んでいこうと思います。(東大大学院留学生アドバイザー)



## 総合商社からドット・コムへ

大西 基文 (S58 経・経)

私は幼少の頃アメリカとカナダに合計約5年間暮らしたことがあり、大学卒業時にはあまり自分のキャリアゴール等を考えたこともなく、単に英語を活かせるインターナショナルな企業ということで伊藤忠商事に入社しました(大学時代はアメリカン・フットボール部に所属し、体力だけには自信がありました)。

伊藤忠時代の14年間は4年間を除いて製鉄プラント営業一本でした。プロジェクト開発/受注と長期ファイナンスが中心の仕事でしたが、接待など日本固有の商慣習が根強く残っている産業でした。残りの4年間は大きな転機となるMBA留学と組合専従でした。色々見聞を広めるにつれ、しだいに中間業者は今後付加価値を作り出しにくいと思いたちちょうどその頃、アメリカでメーカー直販として名を馳せ始めたデルコンピュータと出会い、初めての転職をしました。デルでは個人と中小企業向けのセールスの責任者として、徹底的に直販を叩き込まれました。入社一月前にちょうどデルジャパンでオンラインストアがオープンしたばかりでしたので、デルのオンラインビジネスと共に成長してきたようなものです。

2年半後、今度は文具通販のアスクルと縁があり、入社後ネットオークションを立ち上げ、その後株式公開を見据え、社内の財務体質改善を実現するため経営管理の責任者を務めました。

今年の7月からはアマゾンジャパンにて書籍ビジネスを統括しています。アマゾンジャパンは日本でオンラインストアをオープンしてからまだ2年弱です。しかし、数年以内には全アマゾンファミリーの中でアメリカに次ぐ2番目のサイトになることを期待されています。デル時代にも驚きましたが、日本はインターネット普及率で遅れを取っていると言われる割に、インターネットビジネスが非常に速く伸びるので、決して無謀な目標ではないと思います。

結局お客様はインターネットショッピングに何を求めているのでしょうか？色々ある中、時間とのトレードオフがひとつのキーだと思います。現代社会は時間との戦いです。近くにお店

があっても、そこに行ってじっくり欲しい商品を選んでいる時間がない。ならば空いている時間に欲しいものをパッと探して、パッと購入する。この個人個人のタイムマネジメントを可能にしたことが受けている理由だと思います。

これからもドンドン消費者は食欲になり、求めるものも変化して行くことではと思いますが、その変化を半歩でも手前で読み取り、消費者の皆さんと共に進化し続けられるような仕事に今後とも携わって行きたいと考えています。(アマゾン ジャパン(株) ブックス ゼネラル マネジャー)



## IBM一筋に33年で、オリンピックも経験

鈴木 孝 (S45 理工・電気電子)



私は1970年に上智大学の理工学部を卒業して、すぐに日本IBMに入社しました。当時は知名度も低く、ICBM(大陸間弾道弾)とよく間違われました。入社後は営業部門が産業別になっていて、金融の保険(生命保険と損害保険)の営業所に配属になりSE(システムズ・エンジニア)として、担当したお客様に対し営業員のセリングのお手伝いや適用業務のコンピューターによるシステム構築を仕事として取組んできました。

マーケティング部門での仕事でしたので、色々なお客様、色々な方々とお付き合いさせていただき、自分自身は成長してきました。今日までIBM一筋に33年になりますが、3つの大きな仕事(プロジェクト)が思い出に残っています。その内の一つがオリンピックです。

4年前の長野オリンピックでは初めて単身赴任も経験し、IBMがスポンサーだった関係で大会のIT事業を一手に引受け、組織委員会のメンバーと一緒に情報システムを構築して大会本番に臨みました。私はボブスレー・リュージュ競技会場のシステム部長を務め、やり直しが無く一回きりの本番競技を成功裡に終える事ができました。

その後、東京に帰任しましたが、思い出が残る長野県ボブスレー・リュージュ連盟(NBLF)に加盟して公式審判員のライセンスを取得して、アジアで唯一の競技会場(長野市スパイラル)で開催される全日本大会やW杯大会のお手伝いを行っています。そんな関係で今年の2月のソルトレーク・オリンピックにも一人で応援に行ってきました。色々な職業の連盟の方々やスケルトンの越和宏選手とも友人としてお付き合いしています。先々は国際審判員の資格も目指したいと思っています。また来年の2月には長野でスケルトン競技の世界選手権大会が開催され、今から連盟役員として準備に取りかかっています。

残る2つの仕事については紙幅の都合でご紹介できませんが、いずれも大変厳しく先端でやり甲斐のある仕事でした。だからこそ当時の様子が目に焼きつき、お客様の担当者とは今でも良いお付き合いをさせて頂いています。

IBMでの今は、アウトソーシング事業に所属していて、新

入社員や若手の皆さんの研修企画やスキル育成に携わっています。IT技術も急速に進んでいますが、根本は人材です。人を育てる事の重要性を痛感して、仕事に取り組んでいる今日この頃です。

こうして私は定年まで約4年ですが、仕事にプライベートに何事にも前向きに取り組んでいます。もちろん大学も常々懐かしく思い、種々の集りに積極的に参加しています。IBMの遠藤千朗先輩を通じて、学部の違う“経鷲会”にも…。(日本IBM, ITSアウトソーシング事業部アドバイザープランナー、経鷲会賛助会員)

## お便り～上智大学サッカー部の思い出

岩本基久さん (S23, 経済) から前回のエコノミアンを読む

だとのお便りがありました。岩本さんは、戦前の上智サッカー部に所属。遠い昔のことで、部員の氏名も、何処の大学と試合をしたかも思い出せませんが、只、憶えているのは、二部と三部の入替え戦で勝って二部に昇格し、祝賀会を平河町の中国料理店“南圃園”で、宇多サッカー部長を囲んで優勝杯でビールを飲みまわしたことです。対戦相手の大学名も忘れまして。これを最後に学友達は特別幹部候補生や予備学生に志願したり徴兵されたりで、サッカー部は自然消滅しました。

この当時の思い出をともに語り合える仲間がおりましたら、ぜひともご連絡ください。(経鷲会副会長 遠藤 千晶)



## 掲 示 板

### 現役学生・OB交流会

例年、当会行事の一環として、今年も経済学部3年生ほかを対象に、就職などのアドバイスを行ないます。OBの皆さん、貴重なご経験を話してやってください。OB企業で採用などご関心の向きにもぜひご参加ください。

日時：平成14年10月31日(木)

18:00～21:00

場所：ソフィアーズ・クラブ

### ワインセミナー

「ワインのある生活～解説とテイステング」のテーマで、ワインセミナーのシリーズが好評です。経鷲会事業企画委員長の上原隆一氏(S51経・営、日本ソムリエ協会認定ワイン・アドバイザー)が“案内人”で、下記によりシリーズの後半が行なわれます。ふるってご参加ください。

第3回 平成14年10月21日(月)

18:00～20:00

第4回 平成14年11月19日(火)

18:00～20:00

場所：いずれもソフィアーズ・クラブ

### 第3回オールソフィアーズ囲碁大会

平成14年12月7日(土)

10:00～18:00

日本棋院八重洲囲碁センターAホール  
東京駅前の八重洲口会館9F

Tel: 03-3231-091

主催：経鷲会 後援：日本棋院  
参加費：8,000円

初心者も大歓迎。大会終了後、日本棋院上智大学支部発足の祝賀を兼ねて懇親パーティを行ないます。

経鷲会事務局：古屋毅

Tel/Fax: 048-853-8238

E-mail: t-frykdi@viola.ocn.ne.jp

## 日本のIT頭痛を撲滅したい。

悩みが解消する。視界が開ける。  
求めているビジネスコミュニケーションは、

ケーブル・アンド・ワイヤレスIDCにあります。



### CABLE & WIRELESS

革新的なサービスを提供し続けるケーブル・アンド・ワイヤレスIDCが、ネットワークの問題点を解決し、勝つビジネスへ最大限に貢献します。

0061の電話サービスをはじめ、データ通信やインターネットサービスなどの高品質で経済的なブロードバンドソリューションで、ビジネスの成功に貢献します。お悩みの種は、ケーブル・アンド・ワイヤレスIDCにお任せください。

[www.cw.com/jp](http://www.cw.com/jp)

☎ 0066-11 (毎日9:00～20:00受付/通話料無料)

Delivering the Internet promise™

ケーブル・アンド・ワイヤレスIDC株式会社

idcは、ケーブル・アンド・ワイヤレスIDCの登録商標です。